

「住まい・まち学習」教育実践研修会

現職教員のための住教育の理念と実践手法を学ぶワークショップ



住教育に携わる小学校、中学校、高等学校の家庭科教員の参加を募り、住教育の学習実践の原理や、その手法を学ぶ「住まい・まち学習」教育実践研修会は、昨年に引き続き2回目の開催を行った。会場には、住教育に関心の高い家庭科教員が全国から47名集まり、これからの住教育のあり方について、議論や交流を深めた。

もとより住総研では、学校のみならず家庭や地域における多様な市民を対象に、よりよい住まいと、まちづくりの担い手を育むことを目的とした活動を進めてきた(1993年～)。2006年に住生活基本法が制定され、住まいの「量」から「質」への政策転換を機に、住教育の重要性は更に高くなっている。しかし教育の現場では、住教育について何を教えていかわからない、教材や資料がわからないなどの声が多く、住教育を授業に取り入れにくいというのが現状である。そこで、住総研の「住まい・まち学習」普及委員会(2008年～)では、住教育授業づくり助成や、住教育に関する学習指導要領の整理など、さ

まざまな住教育推進の活動を展開してきた。

今回の研修では、住教育の基本的な概念と、授業デザインの方法、資料や教材などの情報を住教育推進の第一線に立つ講師の方々を迎えて学んだ。また後半のワークショップでは、授業展開の手法、住教育を通して子どもたちにどんな力をつけさせたいかなど、実践に即した住教育の手法が議論された。



前半の講習風景

日時：平成27(2015)年3月26日(木)
主催：住総研「住まい・まち学習」普及委員会
後援：国土交通省

カリキュラムデザイン力を磨く

小澤 紀美子 東京学芸大学 名誉教授



家庭科教育のあり方を考える

家庭科教育は家政学を基底としていますが、その家政学では「衣・食・住」という価値観を重視していましたので、「住・食・衣」に転換したいという想いで、住環境教育の普及に努めてきました。しかし、「住教育は難しい」のひと言で片付けられることが多くあります。

私自身は建築学を選考してきたのですが、住居学を担当するという事で民間の研究所を経て東京学芸大学に職を得て家政学の道に入りました。民間の研究所に入った1972年は、環境の問題として重要なローマ・クラブの報告「成長の限界」が発表された時でした。また、アメリカ家政学会の母であり、環境教育の母であるエレン・スワローの本部も訪れた時に、家政学の原点である「オイコノミス」が、「人間と環境とのかかわり」という認識にいたり、私もそういう視点から家政学を広めていきたいと考えるようになりました。住まいは、家族がどういう暮らしをしたいのか、どういった価値観をもって暮らしを組み立てていくのか、そのすべての基本になります。エレン・スワローのエコロジーの考え方を勉強しながら、応用化学としての家庭科教育のあり方を自分なりに構想してきました。

私は若い研究者時代に、文部省で学習指導要領策定協力委員として10年間協力してきました。さらにその後、教科書検定委員にもなり、家政学、家庭科教育を確立する役割を果たしてきました。教科書検定委員をしている時は、中立性の立場から教科書を執筆することはできませんでしたが、家政学や家庭科教育の確立の立場から、教科書検定委員の役目を終えたあと、自ら教科書を執筆し、監修をしてきました。またその後も、国土交通省の住生活基本法成立にあたって、住教育ガイドラインの策定協力委員としても働いてきました。

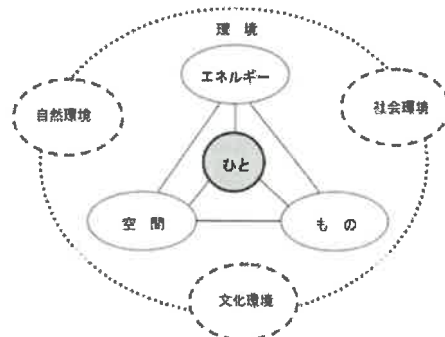
こうした活動のなかで、いつも私の基本となる考え方は、「人と人」の関係とそれを取り囲む「空間」「もの」「エネルギー」があり、さらに「自然」「社会」「文化」と

いう環境の相互関係のなかで、私たちの暮らしが組み立てられているということです(下図)。この関係性をどう捉えて「教える」という「企て」が重要で、ただ単に住まいとしての箱を教えるのではない。そういう立場で、住環境教育の確立を目指してきました。

住環境教育の魅力

住環境教育の魅力とは何なのか。それは、①人と人、人との、人とこと、人と空間など、さまざまな関係性をデザインする力を育てる、②自分や家族の豊かな住生活づくりや他者と共に働く力をつけ、家族や地域社会で協働できる力を育てる、③豊かな住生活を営む自律的・自立的な力をつけ、さまざまな人と協同・交流し、住環境を改善していく力を育てる、④消費者としての判断力や意思決定能力を育てる、ことと考えます。もともと「住」という字は、人が主人公で、そこに大事な観点があります。そして、学んだことを活用する力や、社会に自立的に生きる力を養うこと。そしてこれからは、環境のことを抜きにして語ることはできません。また、地域の住まいや暮らしの知恵を継承して発展させることなども、魅力として挙げられます。

いま私は、子ども環境学会の会長として3.11の後の東日本大震災の被災地を支援しています。被災があったエリアには、もともとの生業がありました。子どもたちもそれをよく理解していて、その暮らしを引き継ぎたいという意欲を持っています。地域の暮らしは、日本だけみ



住教育の基本的な考え方/私たちを取り囲む環境とつながり

でも、北海道から沖縄まで全く違います。つい二週間前には、バリ島へ、島の高校生が自分たちのまちづくりに参加するという実践を見てきました。バリ島の建物のつくりは日本とは全く違います。玄関がなく、どこが入り口かわからないような、風通しのいい空間構成になっています。風土と住まいの関係は機構条件と密接にかかわっているのです。

人間は、学びつづける生き物です。幼児期から成人になって実際に家庭を築くようになるまで、気づきを喚起し、調べて深化させる、思考回路を活性化させていくという学びや教育に対応した「企て」が不可欠です。その学習や思考のながれは螺旋状に広がりながら発展していくように考えていくことが重要です（アクションリサーチ）。本日の研修でも、反省的思考過程をイメージし、さらにそのようなプロセスを考慮したカリキュラムデザイン力を磨いていただければと思います。

どういう能力を養うか

私は、「総合的な学習の時間」創設時の中央教育審議会の委員でした。そのとき、知識伝達型の教育ではなく、探究創出表現型に変えようという考えで、「総合的な学習の時間」が創設されました。それは、住環境教育についても同じ考えで、単なる生態系の仕組みだけではなく、人間と環境とのかかわりや地域の歴史・文化をベースにしていくこと、そして体験型で学習していくということが教育の現場では求められます。また、ただ体験を積み重ねればよいということでもありません。言葉に変換させて、思考過程のなかで、自分の活動と言語を獲得しながら思考回路を積み上げていくこと。体験を経験化し、自分たちの世界観を構築していくことが大切です。

まもなく18歳でも選挙権が得られるようになり、ますます社会変革の担い手として育っていることが求められるようになります。よく「学力」は氷山に例えられます。海の上に浮いている氷山の一角だけで、本当の学力を計ることはできません。本当はそれを支える下の部分に学

力論の本質があります。つまり葉っぱを多くつける教育ではなく、「根っこ」を育てる教育が求められているのです。

教育（education）の本来の意味は、e＝外へ＋duce＝導く＋ate＝させる→能力を導き出すようにする、という意味です。その人のもっているものを引き出すのが教育です。知識伝達が教育ではありません。しかし、児童生徒は教えたからといって学ぶとは限りません。ではどのように教えるのか、これは先生方が日頃知恵を絞っているところだと思います。大学で教えていても、学生が突然目を輝かせる瞬間ということがあります。それは、教員としての喜びでもあります。学ぶことは、教えてもらうことではありません。教科書に書かれていることだけを教えるのではなく、体験をベースとした学習が必要になります。自分と他者、あるいは自然と社会とのつながり、そして協同・協働で考え・実践していくという力、そして、「物語を紡ぎ出す力」がよりよい社会を創り出す力になるのです。

平成25年の文科省の調べによると、総合的な学習の時間と学力との相関について、小学校6年生、中学校3年生ともに、探究活動をベースにした学習で児童・生徒の学習能力には有意な差がみられました。総合的な学習の時間で、自分で課題を立て、情報を集めて整理して調べたりする学習活動をしている学校では、特に応用問題における平均正答率が高いという結果がでています。

住教育の導入

住教育の導入をどうするか。私が大学の授業でやっていたのは、B4の色画用紙一枚で、住まいをイメージするものをつくってもらいます。そのときに、ハサミなどの道具は一切使いません。すべて自分の手だけでつくってもらいます。完成したものをみると、それぞれ想いや、主張があってバラバラです。そういうなかでも、何か共通するものがあります。それぞれの想いを聞いたり、住まいというかたち、あるいは都市のなかの住まいをどうかたちづくっているのかを話し合いながら、自分たちの

● 小澤紀美子（こざわ・きみこ）

1965年 北海道大学工学部建築工学科卒業後、東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修士課程・東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程博士課程修了（工学博士）。㈱日立製作所システム開発研究所研究員を経て、東京学芸大学・同大学院研究科教授。現在、東京学芸大学名誉教授、東海大学大学院客員教授、子ども環境学会会長。

社会活動として、中央環境審議会委員（環境省）、社会資本整備審議会元委員（国土交通省）、日本学術会議連携会員「環境思想・環境教育分科会」委員、中央教育審議会元委員（文部省）などを務める。主な編著書に、『豊かな住生活を考える——住居学』（彰国社）、『これからの環境学習』（風土社）、『子どもの・若者の参画』（萌文社）、『児童心理学の進歩 2005年版』（金子書房）など多数。

住まいについて考える気づきになります。

また、学校の校舎を題材にしてもいろいろ学ぶことができます。私は、エコスクールの改修で、某小学校の授業づくりのお手伝いをしたことがあります。太陽光パネルは、屋上につけるのではなく、学校の側壁につけることを提案しました。そうすると遊んでいる所から子どもたちが見ることができるからです。ほかにも、新しく断熱材が入った壁と、昔の壁がどう違うかというのを感覚でわかるように、わざと古い壁を残してしてもらったり、古いトイレの寸法を測って、新しいトイレがどれくらい広くなるのか、水がどれくらい節水できるのか、設備メーカーの方にも協力していただきながら学ぶということもやりました。そのときは、自分たちの書いたサインや絵をトイレに貼るというワークショップもやりながら、子どもたちも建物をリニューアルするときの片棒を担ぐのです。また、グリーンカーテンも、なぜこれが涼しいのか、なぜビニールのカーテンでは涼しくないのか、「蒸散作用」の原理を学びに取り入れ、科学的な根拠の裏付けも学びのプロセスに取り入れていくのです。

「学ぶ」ことは「問う」ことの一つの事例を申し上げます。日本の小麦の食料自給率はどれくらいでしょうか。おおよそ13~14%で、残りは他国に依存しています。そうすると、ほかの国の水も使っていることになります(仮想水といいます)。あるいは、輸送の際のエネルギーも使います。そういうつながりを学ぶ発想として「ウェビング」の考え方があります。この発想で、全国地球温暖化防止活動推進センター(JCCCA)のプロジェクトとしてつ

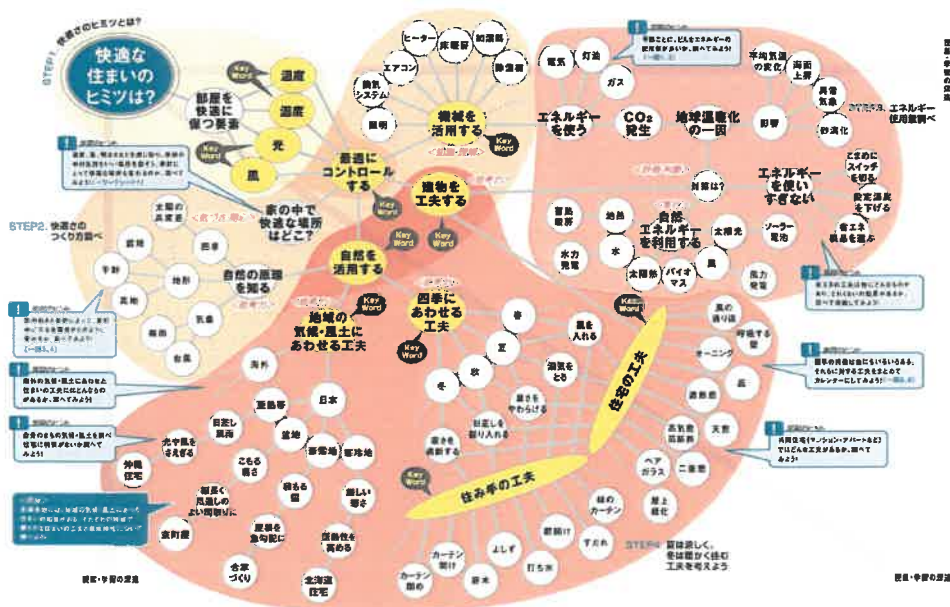
くったのが、温暖化防止の学習のカリキュラムで、住環境教育としては住まいのウェビング(下図)があります。

また、景観まちづくり学習についても取り組んでいます。宮城県仙台市で被災した子どもたちが、自分たちの伝統的な建物から学ぶ、屋号を学ぶというなかで、登り窯や古民家を再生するという活動があり、これが景観教育普及賞で大賞をとりました。また、宮城県日向市駅は、地場の木材をつかって駅をつくり、地元の小学校から高校生までがワークショップに参加して駅からの学びを展開して、都市景観教育普及賞を受賞しています。

さらに私たちが毎日排泄している下水処理など、見えないものを「見える化」した教材も開発し、提供し、学校教育に利用していただいています。具体的には、(財)日本下水道協会が提供し、動画などで微生物が水をきれいに処理していくところを紹介し、学びに役立てています。

年間を通してカリキュラムデザインをすることは難しいことですが、今お話ししたことや事例を参照していただき、単元のなかでどのような力を児童・生徒につけたのかを構想して下さい。私たち自身が当事者となって、自分たちの暮らしの安心・安全を地域でつくっていくということです。

私たちは、単に「知る」ことを学ぶだけでなく、為すことを学び、さらに(他者と)共に生きることを学び、人間として生きることを学ぶということを頭に入れていただき、「考え」「学ぶ」「実践」「考え」……という繰り返しのプロセスによるカリキュラムデザインをしていただきたいと思います。



住まいのウェビング(出典:全国地球温暖化防止活動推進センターJCCCAのウェブサイト[http://www.jccca.org/]より)

*ウェビング/ウェブ(web)はクモの巣。クモが巣をつくるイメージで学習課題を考える手法

小学生期の体験的・実験的学習方法

勝田 映子 帝京大学 准教授



教えるべきことから学ぶべきことへ

私は、小学校家庭科教員を24年やってきました。住教育に取り組む時に、何をしたいかわからない、教材がない、という悩みをよく伺います。そこで自分はどんなふうにして教材をつくってきたのかお話しすることで、少しでも皆様のお役に立てていただければと思います。

今まで、Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Action（改善）という指導案づくりの方法がありました。これは、学習というのは決まりきった文化や知識技能を習得していく過程だという考え方に立って、教えるべき事柄から出発した指導案づくりです。しかし今この方法ではダメだろうと考えています。まず世の中がどんどん変わっています。そして、求められている力が変わっています。これからの子どもたちに最も必要なものは、Plan そのものを自分たちで考えていくデザイン力なのだと考えています。教えるべきことから出発するのではなく、学ぶべきことから出発していく。そういう授業デザインに変えていく必要があるのではないかと思います。

私は、住教育の授業デザインをする時にウェビングという方法を取り入れています。住教育、住まいというのは非常に総合的です。そこでまず、子どもたちが学ぶべきことは何かを考えることから始めます。具体的には、はじめに授業をどういうものにしていくのかを漠然と考えて、学習内容に含まれるコトやモノ、原理、さらには学習する子どもたちの経験値や予想される考えなどをどんどん紙に書き出していきます。それから、それらの間にどういうつながりがあるかを分析し、学習としてのもまとまりをつくっていきます。これがウェビングという手法です。そのまとまりを何時間かの授業に分けて計画、実施、評価していくというやり方です。子どもは無知な白い紙ではありません。すでにいろいろな住居観をもっています。それをどのように学習に生かし、気づかせることでさらに豊かなものへと変えていくのか、子ども自身が学びを再構築するきっかけをつくる授業づくりです。

たとえば、「居心地のよい快適な生活」というのを子どもたちに教えたいとします。そうすると、まず自分のなかで、「居心地がよくなってなんだろう、どんなときに居心地がよいか、身体のこと？ 心のこと？」と考えます。心のことならさらに、どんなことで居心地がいいのか？ 誰と一緒にならそうなのか？ と突き詰めて考えていきます。そのなかで、学習を通して何に気づき、何がわかればいいのか、子どもたちがどうなればいいのかを具体的な姿や行動目標を考えます。そして、そこに子どもが行きつくためには、何が必要か、何が使えるかと、具体的な教材や学習の場を考えていきます。さらに、この学習のゴールとして、どういう表現活動を子どもたちにPlanさせるとよいかも考えておきます。

教材づくりのポイント

どう教えるかではなく、どう学ばせるか。教材は学びたくなるためのツールであるということが大事です。子どもが触ったりいじったりできるような道具でないと教材にならないのかというと、そうでもありません。たとえば、「換気扇は、なぜ通風扇とはいわないのか」これを考えるだけで、子どもは学びます。換気とは何か、天井近くについているのはなぜか？ 逆に回ったらどうなるのか？ 実際に触れなくても、教師がこうしたことに光を当てることで、十分学びたくなる教材になるのです。二つめの視点は、思い込みを捨てることです。これはまず教師が捨てる必要があります。たとえば、「エコで暖かい住まい方」を勉強するときに、子どもでも窓際の陽当たりのいいところが一番暖かいことを既に知っています。でも、もう一度確かめる必要があります。

筑波大附属小学校のときの授業で、子どもたちに「教室のなかで一番暖かいところに行ってみて」と言うと、三つのグループに分かれます。窓にくっついているグループ。窓際の柵を握っているグループ。窓から1mくらい離れたところの日だまりにいるグループ。お互いに絶対ここが暖かいと言ってひきません。では、どうしたら

どこが一番暖かいのか、どうすればお互いに納得するかたちで調べることができるか話し合います。子どもから「計ればいいじゃないの?」と出てきたら、計測してみる。身体できちんと感じて、それから計測に入ります。計測すると、実は窓から1mくらい離れたところが温度的には一番暖かいことがわかりました。すると、子どもたちはものすごく驚きます。そんななか、子どもはこんなことにも気がつきます。「窓って冷たい、鉄は暖かい、なんで?」。そこで、4年生の理科の授業で習った熱伝導の学習を思い出して、柵はアルミで、窓はガラスであるということに気がついていくんです。「アルミの方がガラスより熱をよく伝える!」と、このように子どもたちの思考は発展していくのです。理科の学習と、生活のなかの科学というものが、学校教育のなかでは分断されてしまっています。家庭科はそれをつないで学び直していく教科なのです。子どものなかで学んだことの意味や意義が再構築されていく学習なんです。このときの教材は窓だけです。それだけでも、十分豊かな学習ができるのです。

暖かい住まい方では、熱の伝わり方、放射と対流と伝導がわかればいいんです。そのときの教材はティッシュ一枚でもできます。窓枠のところに1cm幅に切ったティッシュを等間隔に並べて貼って、窓を開けたらどちらに動くか推測させて、ティッシュの動きで空気の流れを見る、これが非常に面白いんです。たとえば、朝一番で学校に来たとき、閉め切った教室の窓を開けると、ティッシュはどっちに動くかという質問をします。これは、まず先に室内の暖まった空気が出ようとしていますので、ティッシュは外側へ流れていきますよね。暖まった空気が外に出ていくから、新鮮な空気が中に入ってこれるわけです。それを子どもたちに教えると、「そうか! 朝、窓を

明けろとうるさくいわれる理由はこれだったのか」って、はじめて子どものなかの意味が再構築されるんです。

またペットボトル1個でも空気の流れの実験はできます。大きいペットボトルの中にお香を入れて、あらかじめ切り込みを入れておいたいくつかの窓を一つだけ開けたり、対面した場所を開けたり、対称的なところを開けたりして空気の流れを見ます。これも簡単な材料で、子ども一人ひとりが確認しながら調べることができます。

住居や住まいを学ぶ時に、ほかの授業の教材をつくる時とは決定的に違う点が二つあります。一つは住居は家族や近隣という他者と共有するものであるということ。もう一つは、その風土にあった家を考えるということです。自立循環型住宅のホームページには、「局所風況マップ」というのがあって、まちの年間の風向きや風光量を調べることができます。それで自分のまちの風土を学ぶこともできると思います。

また、子どもたちの「住まい」でもある学校を是非教材にしてほしいと思います。筑波大学附属駒場中高等学校の場合は、生徒のための生徒による図書館づくりをコンペ形式で決めるという学習を展開しました(詳しくは住宅団体連合会のHP <http://www.jutaku-sumai.jp/education/p018/toshokan-keikaku.html>を参照のこと)。このコンペの一等の賞金は図書を選書権、つまり好きな本を選んでいいという権利を与えていました。お金がかかっていませんが、これだけで俄然生徒のやる気は出るのです。

結局ちょっとしたアイデアなんだと思うんです。子どもを変容させるものを考えてみる。それから視点を変えてみる。そして学校を教材にしていくこと。ぜひこの三つを教材づくりの要にして授業デザインをしてみたいと思います。

◆第一部 「住まい・まち学習」教育実践の考え方

造形教育と住教育の連携への提案

大道 博敏

江東区立越中島小学校 主幹教諭 / 東京都図工作研究会 副会長



造形教育の楽しさを住教育に

私の専門は造形教育です。今日は、家庭科の先生方

にも造形教育を応援していただきたいということと、造形教育の方からも何か家庭科の応援ができたらいいなと思ってやってきました。

図工の時間というのは、理屈抜きで楽しいものです。図工というのは子どもの根源的な欲求を満たし、想いで成り立つ。そして、ここからいろいろなことを学習していきます。たとえば、小学校一年生が、友達とわいわい言いながら、おうちの絵を描いています。家庭科の話では、快適な住まいのための窓などありますが、図工の世界では、どこに窓があろうか、また、風通しなんか考えません。おうちのかたちもどんなものでも全然構わない、どこにだって住むことができます。たとえば、大きな木があれば木の上に住んでみたり、壁一面が全部テレビだったりします。どうやって生活するのかなんて全く考えません。快適とは、合理的なものだけではなく、無邪気なものや、合理的ではないものを楽しむというのも実は大きな部分ではないかなと思います。そういう部分で造形教育がお手伝いできる部分もあるのかなと思っています。

色やかたちに働きかける

今日私が提案するのは、色画用紙を使った授業です。私の学校では、リンテックという会社のニューカラーという色画用紙を使っています。全部で63色あって、1枚15円、100枚入り1500円で購入することができます。よく家庭科の住教育のなかに、授業の最後に模型のようなものをつくって表現物で終わらせるというのがあります。そのときにいろんな色画用紙を使って、まちをつくったり、構造的なものをつくったりすることができると思います。つまり、色彩も重要な要素ではないでしょうか。

私は絵を書く時も、白ではなくミルクという色を使います。一般的には白画用紙を使うと思いますが、白が強すぎるのです。ミルクを使うと余白がきれいなので、平気で書き残しができます。子どもたちは、そういう白の違いも敏感に見つけます。色というのは個人個人に訴えるものがありますから、たとえば家庭科室の棚のところにずらっと並べておいて、子どもが自由に選べるようにしてあげる。一度に全色揃えたら10万円くらいかかりますので、最初は24~30色くらいで、あとは徐々に色を増やしていくといいと思います。大きさとしては八つ切りを半分の大きさに切ると、紙の厚みが面積に対してちょうどいい大きさになると思います。金額的に計算すると、A4判くらいのもので間取りの模型などをつくるとして、5色つく

ったとしても一人当たり約40円程度です。

次に、図工の学習指導要領のなかでは「色やかたちにはたらきかける」や、「場所、場に働きかける」という言葉がよく出てきます。これは私の実践ですが、白いものだけ集めてさまざまな場所に構成するという授業をしたり、ビニールの傘袋を膨らませ、どこにどう飾ったらきれいかというようなことも図工の授業で展開しています。何をつくるかよりもつくる活動を重視しています。さまざまな材料を通して場に働きかけることで、材料や場の特徴や性質を理解し、生かす活動となるのです。合理的ではありませんが、住むあるいは過ごす楽しさに通ずる所があるように感じます。

高校工芸を住教育の参考に

実は私は、高校工芸という教員免許を持っています。当初は高等学校で工芸を教えたいと考えていました。しかし、なかなか採用がないと聞き、図工専科という職に就きました。高校工芸の内容はとても興味深く、住教育に関わる所が、かなりあります。たとえば、暮らしのなかでのさまざまな物の形や、昔の台所と今の台所を比較したり、スチレンボードだけで椅子を造ったり、今和次郎さんの観察の仕方が教科書に出てきたりしています。また、食がテーマのところでは、自分たちが普段使う食器を、焼き物でつくるといものもあります。自分でつくった食器で食卓を飾る、日常生活での豊かさを意識させるための題材です。そのほかにも、人間のスケールや世界の住まいなど、高校工芸のなかには住教育の楽しい部分、面白いところ、興味を引く部分というのが網羅されています。高校工芸の教科書を副読本として使用してみてもいいでしょうか。そして、工芸や美術、図工の先生と連携しながら、総合的な学習の時間も利用することで、住教育がより楽しい時間になればと思います。



「場所、場に働きかける」造形教育／ビニールの傘袋をつかった造形

アクションリサーチの授業展開

仙波 圭子 女子栄養大学 教授



授業デザインのなかで大切にすること

教師が授業を構想するときは、授業デザインし、その仕掛けとしてツールと場があり、教育的かかわりのなかで授業が展開され、振り返りのなかで再デザインしていくというかたちで展開していきます。このなかで一番大切にしたいのは、やはり学習者となる児童生徒のねがいです。学校教育で、住生活について系統的に学ぶのは家庭科だけです。家庭科は「より良い生活をつくる」ための実践力をつける教科です。教科の目標も学習方法も問題解決とのかかわりは深く、問題解決学習を取り入れることが求められています。

たとえば、荒井紀子の編著書のなかにヒントになる視点があります。「Plan Do See から批判的リテラシーの学びへ」(『新しい問題解決学習』教育図書)そして、「学び、つながり、発信する家庭科」(『パワーアップ家庭科』大修館書店)という二つの視点です。仮説をたてて実証するPlan Do See (計画・実行・振り返る) は問題を解くことに焦点があり、単発の問題解決では学習の積み上げは困難です。子ども自身が「問題」そのものを感知して、何が問題かをつかみ、それに取り組むといった、子どもの興味・関心から出発することで、体験を積み上げていくこと(螺旋状の学習の発展)ができます。そのときに、思い込みや偏見にとらわれず、何が問題か冷静に判断する批判的思考が重要なのです。

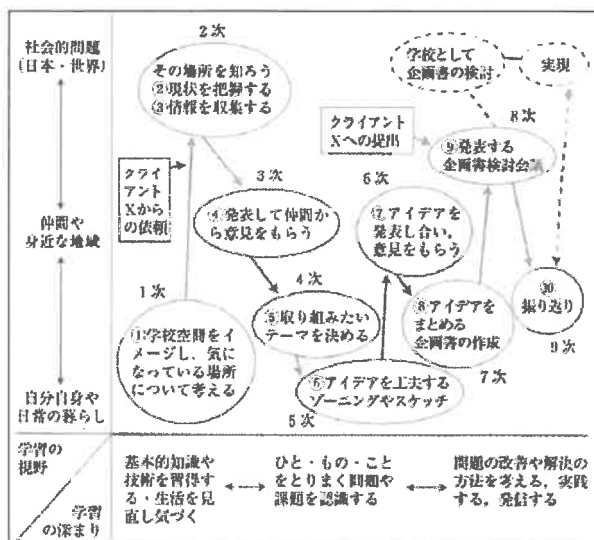
あくまで大切なのは、子どもの視野を広げ、思考力をはぐくむ問題解決のステップを踏む学習です。家庭科の住生活の学習では、実証科学的な学習に加えて、個人・家族・コミュニティ・社会が複雑にからみあう問題を題材とします。その背景を探り、改善・解決について考えさせることで思考力・判断力が鍛えられます。

学びの構造図、アクションリサーチに学ぶ

授業デザインをするときに、生徒の思考や活動のプロセスをイメージする手立てとして「学びの構造図」

が役立ちます。これにより、学習がどのようなベクトルを持つか方向性が明らかになります。縦軸は学習の視野を捉えています。横軸は、学習の深まりで、デューイの省察的思考がベースとなる問題解決過程を大きく三つに分けて配置されています。①基本的知識・技術を習得し、生活を見直し気づく、②ひと・もの・ことをとりまく課題や問題を認識する、③問題の改善や解決の方法を考える、実践する、発信する。これらの矢印が可逆的になっているのが家庭科の特徴でもあり、面白さだと思います。

ロジャー・ハートの『子どもの参画——コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』(萌文社)という本があります。クルト・レヴィンが提唱したアクションリサーチの定義は、実践者によってさまざまですが、「現実の問題解決を目指し、目標となる望ましい状態に向けて、変革していくため実践と研究をおこなうこと」だと石川一喜が書いています。また前掲のロジャー・ハートによれば、アクションリサーチの意義は「研究の過程をチェックし、目標達成度を組み込んでいるので、子どもたちが自分たちの



学びの構造図

出典：荒井紀子編『生活主体を育む—未来を拓く家庭科—』(ドメス出版)

やっていることを批判的に評価する方法を持つようになること」とあります。小学校、中学校版はかなり前にでていますが、総合的な学習の時間を核とした課題発見・解決能力、論理的指導力、コミュニケーション能力等向上に関する指導資料として高等学校版の『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』が平成25年7月に発行されました。ここにある手法を家庭科に取り入れられたらというふうに思います。というのも、総合的な学習の学びは、まさにアクションリサーチだからです。

総合的な学習の時間を活用する

総合的な学習の時間が創設されたのには、さまざまな力を必要とする社会背景があります。基礎的・汎用的能力、社会的職業的自立、社会職業への円滑な移行に必要な力として人間の社会形成能力、自己理解、自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力などがあげられます。そういうなかで、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探求的な学習、そして、他者と協同して課題を解決する協同的な学習、この協同とは生徒間だけではなく、地域の人や、地域社会への参画、貢献なども含まれます。そして体験活動を重視することで、思考力、判断力、表現力などを育む言語活動を充実させ、各教科・科目との関連を意識した学習活動を展開することを目標とします。

探求的な学習における生徒の学習の姿は、日常生活や社会に目を向け、生徒がみずから課題を設定し、探求の過程（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）を経由すること、そして自らの考えや課題が新たに更新され、探求の過程が繰り返されます。単元構成にあたっては、育てようとする資質や能力お

よび態度がどこか、というのをしっかりと考える必要があるということ。そして、教師はどこでどのような意図的な働きをする必要があるのか、あるいは、関わり方の不必要性についても同時に考えている必要があると思います。留意すべき事柄は何かを明らかにし、学習の展開における生徒の意識や活動の向かう方向を的確に予測すること。それをとにかく生徒の立場で考えること。学校教育において系統的に住まいや住環境を扱ってきたのは家庭科ですが、総合的な学習の時間の導入によって、体験的な活動や地域との連携がより取り組みやすくなったといえます。住まい方や住環境をテーマとする学習は、対象が身近な空間から住環境までと内容が広範であること、地域や学校の個性が生かせるという特長もあります。子どもたちは感覚を駆使して対象とかかわる生き生きとした体験的な活動を通してこそ、自分の考えをもち、表現し、周囲と交流し、学んだことを自分の生活に活かしていくことができるでしょう。それは、生活を創造する力の基礎を育むものと考えます。

総合的な時間の学習は家庭科の学び方や学習内容と共通点や親和性も高く、導入によって体験的な活動や地域との連携も取り組みやすくなっていくと思います。また、総合的な学習との関連をはかることで、家庭科の学びを児童生徒自らが、発展学習し、進化させることができるのではないかと思います。たとえば、最近問題になっている空き家の問題でも、身近な住宅街をフィールドワークしながら、住まいのライフステージを考えることができます。国土交通省による空き家利用に関する冊子や、空き家を地域活性化につなげている事例もありますので、そういう問題もぜひ家庭科の教材として取り上げていただきたいと思います。

◆第一部 「住まい・まち学習」教育実践の考え方

住教育の実践に必要な資料

志村 優子 まちづくりプランナー



学びを魅力的にする情報とは

去年の研修会のアンケートのなかで、住教育はやり

たいけれども、住領域については専門的に勉強したことがないから自信がないという先生がすごく多くいらっしゃいました。しかし「住」は、誰もが実践者で

す。先生ご自身も、これまで何十年と住体験があり、自分の暮らしについて考えてきたと思います。そのことでもう一度自信をもっていただけたらと思います。今日紹介したいのは、ヘレン・ケラーの「What I'm looking for is not out there, it is in me」という言葉です。さきほど小澤先生が「教育とは子どもたちがもっている力を外に導きだすこと」という話がありましたが、同じように先生方自身も、自分自身から考えを導き出していくことをぜひ実践していただけたらと思います。

一方で、学びを魅力的にするのは、「へえ！なるほど！」という気づき、感動の部分で好奇心を刺激します。そして、「ハテナ？何でかな？」と子どもたちが疑問に思うことで、探究心がスイッチオンされます。思考スパイラルのなかに、これらの「！」や「？」がうまく繋がることで、子どもたちがどんどんひきづりこまれて、学びが深くなっていくのが理想的です。そこで「！」や「？」を喚起するさまざまな資料や情報をぜひ活用していただけたらと思います。

資料、情報、教材を活用する

まず最初に紹介するのは、体験型の学習施設です。たとえば、ハウスクエア横浜という住宅展示場のなかに、住まいの情報館が併設されています。ここでは、木造住宅の軸組構造のモデルがあって、筋交い材があるのとないのとで、揺れ方が全然違うことがわかります。モジュールワンダーランドというコーナーでは、蹴上げ、踏み込み幅がそれぞれ違う階段が三つ並んでいて、どんな階段だと昇りやすいか、蹴上げが高くて踏み込みが狭いと怖いということを、実際に体験することができます。近くにこういう施設があれば、是非活用してもらえるといいと思います。

次に、深川江戸資料館では、江戸の町や住まいがかなり細かく再現されています。子ども向けのパンフレットもありますので、これをもって町を周ると学びも深くなります。たとえば、同じ階段でも、江戸資料館の方は、梯子階段のようなもので、二階にのぼるには手すりもないし、すごく怖い階段です。また夏休みのお婆ちゃんの家でみた階段と比較するなど、さまざまな場所で見たものを比較しながら、自分自身で学びや発見ができるようになると思います。

こうした施設は校区から遠くて、なかなか子どもた

ちをそこまで連れていけないということもあると思います。そういう時には、地域のなかに保存されている古い建物もたくさんありますので、ぜひそういうところと積極的に関わりをもってみたいと思います。地域には、保存のために一生懸命活動していらっしゃる方も大勢いらっしゃいます。たとえば、文京区には、旧安田楠雄邸庭園という建物があります。大正時代に清水組（現清水建設）が手がけた住宅で、保存されて一般公開されています。当時としてもたいへん手の込んだ造りの建物で、ここで畳というものを初めてみるという小学生もいるのではないかと思います。また、ほかで見てきた階段とは違ったかたちの階段を見つけることもできると思います。

また実際の建物のほかにも、好奇心を刺激するような教材として、『3びきのくま』（トルストイ作/福音館書店）という絵本や、『名作漫画の間取り』（影山明仁著/ソフトバンククリエイティブ）などの図書も、子どもたちの興味をそそる良い資料になると思います。一般財団法人住総研の図書館には、住まいに関する蔵書が2万冊あって閲覧が可能です。また、はじめに紹介したハウスクエア横浜の住まいの情報館、あるいは新宿のオゾンにも住まいに関する図書コーナーが充実していますので、ぜひ足を運んでみていただけたらと思います。

子どもたち自身が、それぞれいろんな学びを見つけ、考える力が育つことが理想的です。そしていつか家を建てるという時に、これまでインプットされた学びが、最終的にアウトプットできるような力を引き出す資料や情報を見つけ、活用してほしいと思います。



住総研 HP で公開されている
住教育授業実践

▽住教育に関する HP はこちら

住総研 <http://www.jusoken.or.jp/> [住まい・まち学習](#)
住生活月間 <http://www.jh-a.or.jp/jyuseikatu/top.html> [住教育](#)へ

住教育推進を第一線で支える各講師による講習のあと、後半は参加者を小学校、中学校、高等学校ごとにAからEまでのグループに分けて、対話型のワークショップを行った。各グループには、ひとりずつファシリテーターが付き、グループの話し合いを誘導する。今回のテーマは、「教材を満たす思考回路を磨く」。これは、子どもたちに教えたこととは何か、どういう力をつけたいのか、そのうえで、カリキュラムデザインをどのようにすればいいのか、学んだことを実際に活用するにはどうすればいいのかなど、住教育の実践に際した具体的な手法についてグループで議論し、これからの住教育の糸口を掴むものである。

ワークショップ終了後には、各グループによる発表を行った。Aグループ（小学校）は、小学生に育てたい力として、掃除や整理整頓など自立した生活習慣などのほかに、身の危険を守る安全な生活も欠かせないと発表。「ともに生きる、ともに暮らす」ために、環境の配慮・住文化の理解に関わる知識と行動を兼ね備え、豊かに暮らすための力を養う「自

立・共生・夢」が議論のテーマとなった。

Bグループ（中学校）は、中学生につけたい力として「守る」がキーワードとしてあがった。防犯や防災から守るための住まいや、バリアフリーやユニバーサルデザインによる住まいのあり方、また自分自身の危機管理能力も不可欠であるとした。特に中学生は、高校へつながる学びと、社会人になっても必要な自立した生活のための知識や実践の必要性が議論された。またCグループ（中学校）は、住まいを間取りから考え、それぞれの問題点やケースに応じた課題を解決しながら自分たちの家を見つめ直すという考え方から、Dグループ（高等学校）は、衣食住すべてに関して何を大切に生きていくべきなのか、家族が大切にすべきものは何なのかという根源的な問いかけから、授業デザインしていくことを議論。

さいごのEグループ（高等学校）は、実際に高校生の授業の導入としても使えるような話し合いをグループ内で展開。まず「今住んでいるところへ苦情の手紙を書いてみよう」では、カラスがゴミを散らかす、オーディオの音がうるさい、地下鉄工事で夜が



ワークショップ風景／小学校・勝田映子 (A) チーム



ワークショップ風景／中学校・仙波圭子 (B) チーム



ワークショップ風景／中学校・志村優子 (C) チーム



ワークショップ風景／高等学校・横谷礎チーム (D) チーム

眩しい、ショッピングセンターが倒産して買い物が不便、駅前広場のデザインが良くないなど、さまざまな苦情を書き出す。それに対して、次は苦情を受けた側としてその解決法や回答を書き出すというもの。このプロセスにより、住まいにまつわる問題は、周りに住んでいる人の顔がみえたり、近所の人と知り合いになることで、ほとんどのことが解決できるのではないかと考察。個人的な苦情は、近隣の人と顔をあわせたら挨拶することからはじめることから、公共的な苦情は一人ではなく近隣の人と協力することで、地域やコミュニティで解決できることもあるのではないかと議論内容を発表。これが、ぜひ授業でもやってみないと、参加者から好評であった。

総括として小澤氏から、「エデュケートの意味は、生徒から導き出すだけではなく、教師自身が持っている力を自分自身で引き出すことも重要なこと。今日の経験から、自分自身の力を引き出し、住教育に魅力を感じたのであれば、ぜひ仲間をつくり、つながり合いながら、これからの住教育の活動に繋がっていただきたい」と、参加者に呼びかけた。(文=帳卷子)

この研修で役に立ったこと、印象に残ったことは？

- 講演のなかで「指導案づくりから授業デザインへ」、「どう教えるかではなく、どう学ばせるか」という言葉が印象に残りました。
- 住まいの学習でおさえなければいけない重要事項と、教材づくりの発想の仕方のヒントを学びました。
- 住居というのは住む場所だけではなく、住む人のライフスタイルや地域性、価値観などを考える題材だと感じました。どう暮らしたいのか、どう生きたいのかを考える力を育てる分野だと思いました。

住教育を行うにあたり、お困りのことがありますか？

- 大きすぎてつながりを確実に捉え、指導につなげるのは難しい。
- 教科書通りに教えるだけでよいのか、重要なことがおさえられない。
- 教材、とくに実物を使ったものが少ない。食や衣なら「作って食べる」、「作って着る」といった体験ができるのに対し、「家を建てる」、「部屋の配置」といった実習は難しく、生徒の意欲が導きにくい。
- グループワーク等の実施や講評について、意見を伺えるような専門家とのネットワークがない。
- 実際に実践例で挙げられている授業を受けてみたい。文面だけでは、授業の山場を感じるできないので。



ワークショップ風景／高等学校・大道博敏（E）チーム



全体発表／Eグループ・大道博敏氏発表の様子



全体発表／議論内容をチームごとに発表



全体発表／会場の様子